

# 高等学校における「文法」指導の実態調査

— 広島県内の公立高等学校を対象に —

広島県立安古市高等学校 池岡 慎

## 0. はじめに

検定文法教科書が廃止されたにも関わらず、数多くの高等学校で、特別に文法授業のための時間を設けていることが三浦 (1993: 8-10) によって報告されており、依然として文法の比重の重さをうかがわせている。

日本の英語教育において、文法をどのように考えるかについては、数多くの議論がなされてきているが<sup>1</sup>、実際の高等学校の教師は、「文法」指導について、どのように考え、実践しているのだろうか。

そこで、本調査では、高等学校における「文法」指導についての実態を調査し、加えて Oral Communication (以下 OC) の導入にともなって、教師に「文法」の指導法、および「文法」指導の方針にどのような変化があるのかを調べることにする。

なお、ここでいう「文法」とは、高等学校で日常指導されているものであると、ご理解いただきたい。

## 1. アンケート調査 (APPENDIX 2 を参照)

### 1.1. 調査目的

本調査は、以下2つを明らかにすることを目的としている。

- (1) 広島県の公立高等学校における「文法」指導についての実態について
- (2) OC の導入にともなって、現場の教師に「文法」の指導法、および「文法」指導の方針にどのような変化があるかについて

### 1.2. 調査時期、対象および内容

1994年9月、広島県の公立高等学校 (全日制普通科) および、英語教師を対象に実施した。調査内容に関しては以下の通りである。

- 質問A ... 履修パターンについて  
質問B ... 教材 (テキスト) について (質問A,Bは、各高等学校を対象)  
質問C ... 教職年数について  
質問D ... 指導展開および形態について  
質問E ... OC と「文法」指導との関連について (質問C,D,Eは、英語教師全員を対象)

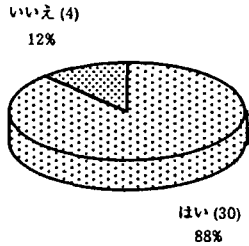
## 2. 結果と考察

アンケート調査用紙は、広島県内の公立高等学校36校、英語教師336名に送付し、34校、282名からの回答があった。(回収率83.9%)

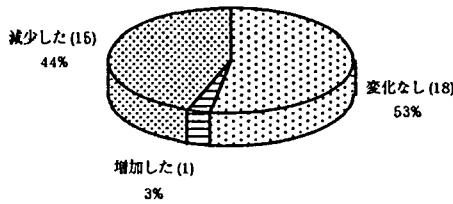
2.1. アンケート集計結果

質問A. 履修パターンについて

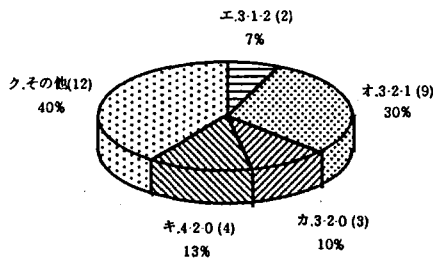
(1) 1年生時において「文法」指導のための時間を設けていますか。(補習・課外授業は除く)  
(N: 34)



(3) 昨年度と今年度の Grammar の授業の時間数に変化がありますか。(N: 34)

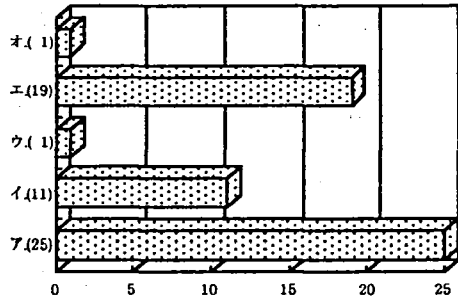


(2) (1)で「はい」と答えられた学校におたずねします。1年生時の実際の履修パターンを教えてください。(時間数/週) \*左から 英語 I-G-OC  
(N: 30)



(4) (1)で「はい」と答えられた学校におたずねします。1年生時において「文法」指導のための時間を設けている理由を教えてください。(複数回答可)

- ア. 英語 I の教科書では文法の体系的学習が不十分だと思う。
- イ. 受験のため。
- ウ. コミュニケーション能力を養うため。
- エ. 独立して指導した方が能率が上がるため。
- オ. その他



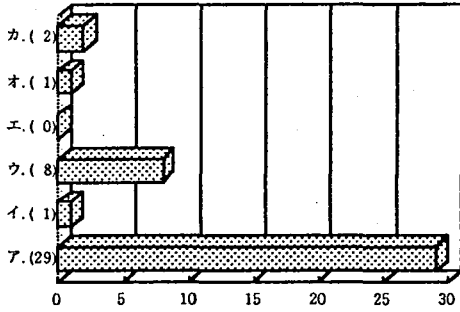
(5) (1)で「いいえ」と答えられた学校におたずねします。「いいえ」と答えられた理由を教えてください。(複数回答可)

- ア. 学習指導要領に示されていないから。 ... 0
- イ. 英語 I の教科書で十分だと思う。 ... 1
- ウ. 生徒に自習させている。 ... 1
- エ. 「文法」指導のための時間がない。 ... 1
- オ. 補習などでやっている。 ... 1
- カ. 特にする必要を感じない。 ... 0
- キ. 他学年で行っている。 ... 0
- ク. その他 (作文の授業で併用) ... 1

質問B. 教材（テキスト）について

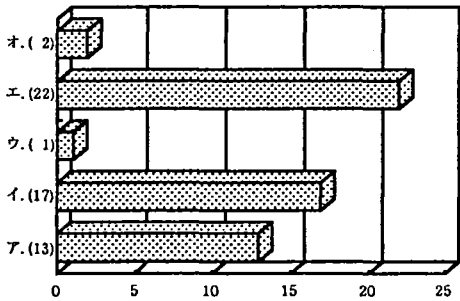
(1) 文法の教材は主に、どのようなものを使用していますか。（複数回答可）

- ア. 準教科書的なもの
- イ. 教科書附属のプリント
- ウ. 市販の問題集
- エ. 海外の文法書
- オ. 自作のプリント
- カ. その他

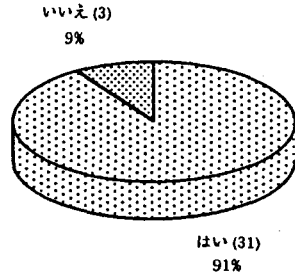


(2) どのような目的で、その教材を使用されていますか。（複数回答可）

- ア. 受験のため。
- イ. 中学校で十分な力がついていないので、それを補うため。
- ウ. コミュニケーション能力を養うため。
- エ. 独立して指導した方が能率が上がるため。
- オ. その他

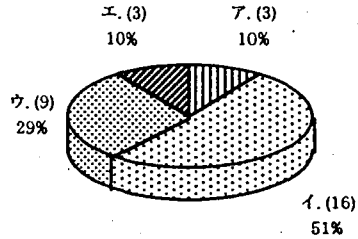


(3) 生徒にレファレンスブック（参考書）を持たせていますか。（N: 34）



(4) (3)で「はい」と答えられた学校におたずねします。どのように使用させていますか。（N: 31）

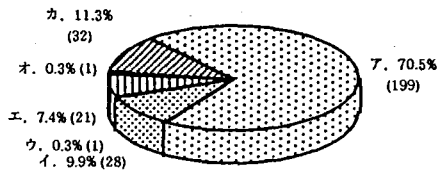
- ア. 特に指示はせず生徒が自習用に利用している。
- イ. 教師が範囲を指定して自習させている。
- ウ. 教科書等と授業で併用している。
- エ. その他



### 質問D. 指導展開および形態について

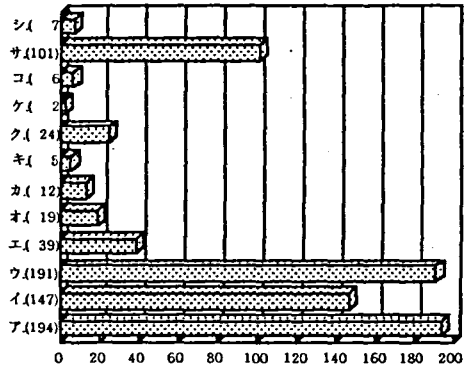
(1) 授業で「文法」を指導される際、主にどのような展開をとられますか。(N: 282)

- ア. 日本語で説明 → 練習問題 → 答え合わせ
- イ. 日本語で説明 → 音声指導 (テープ等) → 練習問題 → 答え合わせ
- ウ. 特に説明はせず、テキストにしている練習問題の答え合わせ
- エ. 例文を数多く提示 → 生徒に規則を気づかせる → 解説
- オ. 英語で導入 → 場面設定 → 練習 → 解説
- カ. その他



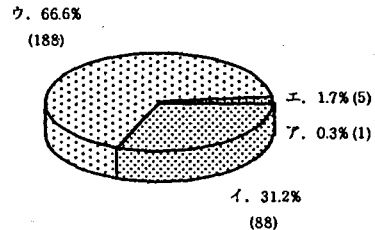
(2) 授業で「文法」を指導される際、主にどのような形態をとられますか。(複数回答可)

- ア. 日本語のみで説明している。(例文は除く)
- イ. テキストに出てくる例文を生徒に音読させる。
- ウ. テキストに出てくる例文以外の例文を利用する。
- エ. 教師が口頭で英語を使用する。(例文は除く)
- オ. 「場面」を設定したり、ゲーム等の活動を取り入れている。
- カ. ALT とのチームティーチングをしている。
- キ. テープを利用する。
- ク. 教師が英英辞書を利用する。
- ケ. 生徒に英英辞書を利用させる。
- コ. 生徒に和英辞書を利用させる。
- サ. レファレンスブック (参考書) を利用する。
- シ. その他



(3) 授業で「文法」を指導される際、「文法用語」をどの程度使用されていますか。(N: 282)

- ア. 全く使用しない。
- イ. 全般にわたり使用している。
- ウ. 必要な場合のみ使用する。
- エ. その他



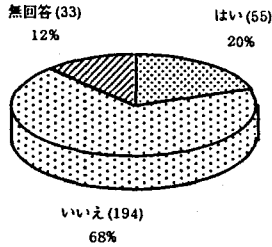
(4) 「文法」の指導で、特に気を配っていること (工夫されていること) は何ですか。

(5) 「文法」の指導で、特に苦勞されていることは何ですか。

[(4),(5)に関しては APPENDIX 1 を参照]

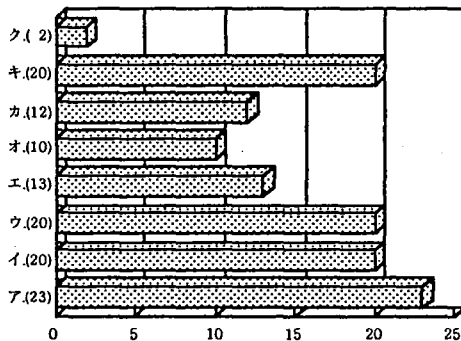
### 質問E. OC と「文法」指導との関連について

(1) 新しく Oral Communication が導入されて「文法」の指導法および「文法」指導の方針に変化がありましたか。(N: 282)



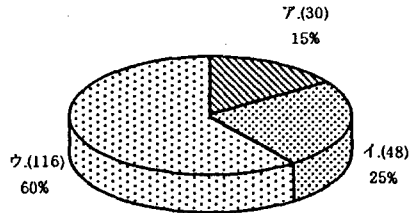
(2)(1)で「はい」と答えられた先生におたずねします。どのような点で変化がありましたか。(複数回答可)

- ア. 生徒が犯す小さな文法上の誤りに対して寛容な態度になった。(特に、英作文や口頭発表等において)
- イ. 音声面を重視するようになった。(抑揚、文強勢等)
- ウ. その文法項目が実際に使用される「場面・状況」を重視するようになった。
- エ. 「話す・聞く」活動における「文法」指導のあり方に関心を持つようになった。
- オ. 生徒に英語を使用させる機会が以前より増えた。
- カ. 教師が英語を使用する機会が以前より増えた。
- キ. 「文法」指導の時間が減り、十分な指導ができなくなった。
- ク. その他



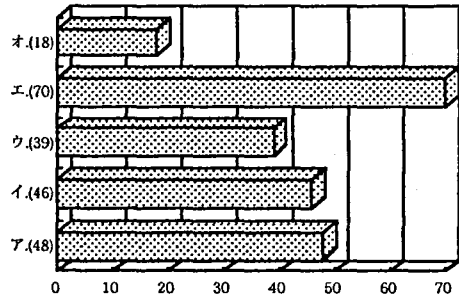
(3)(1)で「いいえ」と答えられた先生におたずねします。その理由を教えてください。(N: 194)

- ア. 以前から「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしている。
- イ. 特に、「話す・聞く」ための「文法」指導の必要性を感じない。(→(4)へ)
- ウ. 「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしたいと思うが、諸事情で現在までできていない。(→(5)へ)



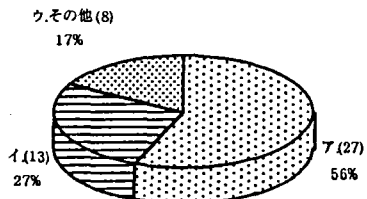
(5)(3)の中で、ウ. を選ばれた先生におたずねします。その理由を教えてください。(複数回答可)

- ア. 時間的余裕がない。
- イ. 教材が適していない。
- ウ. どう指導してよいかわからない。
- エ. 受験のための指導をしなければならない。
- オ. その他



(4)(3)の中で、イ. を選ばれた先生におたずねします。その理由を教えてください。(N: 48)

- ア. 現在の「読む・書く」中心の「文法」指導で、「話す・聞く」力も養成できると考えている。
- イ. 「話す・聞く」ためには、「文法」の知識はあまり重要ではないと考えている。
- ウ. その他



## 2.2. 考察（冒頭の番号は調査項目に対応）

### 質問A. 履修パターンについて

- (1) ほぼ9割の高等学校で「文法」指導のための時間を設けていることがわかる。
- (3) 半数以上の高等学校が昨年度と同じ授業時間を確保しており、各校等学校が「文法」指導を重要視していることがわかる。また、「減少した」と回答のあった15校の内、（「文法」指導のための時間を設けていないと答えた4校を除く）11校（全体の32%）においても、「文法」指導のための時間を確保していることが(2)の結果からわかる。
- (2) (その他)の内訳については、12校中5校で4-1-1, 3校で3-3-0, 残りは3-1-1, 4-2-1, 4-1-0等のパターンをとっている。また、OCのための時間をとっていない学校の中には、英語Ⅰの授業を使い、OCを2週に1回、月に1回、学期に2回で実施しているというように、あくまで「文法」の授業を確保した上での時間配分となっている。(2)のア、イ、ウについては回答数0であった。)
- (4) 「文法」指導のための時間を設けている理由として、受験指導を意識した体系的、能率的な学習効果をねらっている学校が多いことがわかる。また、このことは、質問Bの(2)の教材使用の目的に対応するところでもある。

### 質問B. 教材「テキスト」について

- (1) 準教科書的なものを採用している高等学校が多いことがわかる。また、ウ.の市販の問題集を採用しているところもあり、受験意識の高いことがうかがわれる。このことは、次の(2)の結果からもわかる。
- (3) 9割以上の高等学校で、レファレンスブック（参考書）を生徒に持たせていることがわかる。そして、どのようなものを持たせているかについては、先に触れた準教科書に付随したものを使用する傾向が強い。また、その使用方法に関しては、授業では補いきれない部分を生徒の自習にまかせる傾向にあることが次の(4)の結果からわかる。(その他として、定期考査の範囲に含めたり、長期休暇の課題としている学校もある。)

### 質問D. 指導展開及び形態について

- (1) 「どのような展開をとっているか」に関しては、圧倒的にア。(日本語で説明 → 練習問題 → 答え合わせ)を選んだ教師(70.5%)が多いことがわかる。これを教職年数別(表1)でみると、全体的に、同様に高い数値であることがわかる。つまり、このことから「文法」の指導展開においては、多くの教師が教職年数を重ねるごとに、その展開を変化させるのではなく、ほぼ一定のパターンを持ち続ける傾向にあるとは言えないだろうか。

(表1) [教職年数別における指導展開]

教職年数	ア.	イ.	ウ.	エ.	オ.	カ.	合計
1-10年	68.1 (75)	9.0 (10)	0 (0)	5.4 (6)	0.9 (1)	16.3 (18)	(110)
11-20年	73.5 (64)	11.4 (10)	1.1 (1)	6.8 (6)	0 (0)	6.8 (6)	(87)
21-30年	75.4 (43)	5.2 (3)	0 (0)	12.2 (7)	0 (0)	7.0 (4)	(57)
31年以上	60.7 (17)	17.8 (5)	0 (0)	7.1 (2)	0 (0)	14.2 (4)	(28)
全体	70.5 (199)	9.9 (28)	0.3 (1)	7.4 (21)	0.3 (1)	11.3 (32)	(282)

(数値は回答者数を書く教職年数の人数で割ったもの(%))  
(カッコ内の数値は回答者数)

カ。(その他)を選択した教師が若干名いたが、これは、その多くが上述したア。を中心に、その他の項目を選択した教師であり、教職年数10年以下の教師にその傾向が多く見受けられ、「文法」指導において、様々な試みをしていることがうかがえる。また、表1の数値だけでは断定できないが、イ。とエ。を比較した場合、教職年数11-20年の教師は指導展開において、例文を用いることを中心とするよりも、音声指導などの練習を中心とする傾向がうかがえる。その一方で、教職年数21-30年の教師は、音声指導より例文を数多く使用することを中心とする指導展開をとる傾向がうかがえる。

(2)「どのような形態をとっているか」に関しては、ア。(日本語のみで説明している。(例文は除く))、イ。(テキストに出てくる例文を生徒に音読させる。)、ウ。(テキストに出てくる例文以外の例文を利用する。)を選択した教師が圧倒的に多いが、その一方で、わずかではあるが、エ。(教師が口頭で英語を使用する。(例文は除く))、オ。(「場面」を設定したり、ゲーム等の活動を取り入れている。)を実践している教師がいることには注目すべきではないだろうか。

(3)「文法用語」の使用に関して、ウ。(必要な場合のみ使用する。)(66.6%)を選択した教師が多いことは、質問Dの(4)(APPENDIX)と合わせて考えると、生徒に対して「わかりやすい」文法指導を意識し、心がけている結果ではないだろうか。

#### 質問E. OCと「文法」指導との関連について

(1)グラフ中の無回答(12%)については、OCの授業を担当していないという理由から答えてもらえなかったものである。それ以外で、若干、回答者に質問の表現面で誤解を招いたと思われるものを除き、質問の主旨(つまり、OCをきっかけとして「文法」の授業や英語I,IIで文法事項を指導する際に、その指導法及び、指導方針に変化があったかどうか。)を理解していただいたようである。

結果として「OCをきっかけとして、「文法」の指導法及び、その指導方針に変化があったか」について、「はい」と答えたのは全体の中で55名(20%)であることがわかる。

しかし、(2)の選択項目のキ。(「文法」指導の時間が減り、十分な指導ができなくなった。)は、文法指導において、「話す・聞く」ことを意識するようになったとする立場をとる他の選択項目とは異なるものである。つまり、キ。以外(または、キ。を含めて他の項目も選択)を選択した場合に「話す・聞く」ことに対する変化があったと考え、(表2)から、最終的に55名中44名(全体の16%)に変化があったことになる。

また、(表2)から、文法指導において「話す・聞く」ことを意識するようになった教師の教職年数間にあまり差がない(31年以上は除く)ことにも注目すべきではないだろうか。

(表2) 「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導に関する変化」

教職年数	キ。以外を選択	キ。を含めて他の項目も選択	キ。のみ選択	
1-10年	12.7 (14)	5.4 (6)	5.4 (6)	
11-20年	11.4 (10)	1.1 (1)	1.1 (1)	
21-30年	15.7 (9)	3.5 (2)	3.5 (2)	
31年以上	7.1 (2)	0 (0)	7.1 (2)	合計
全体	12.4 (35)	3.2 (9)	3.9 (11)	19.5 (55)

(3)(1)で「いいえ」と回答した教師が7割近くいるが、しかし、選択項目のア。(以前から「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしている。)で、15%の教師が実践していることには注目すべきではないだろうか。

また、ウ。(「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしたいと思うが、諸事情で現在、まだできていない。)を選んだ教師が半数以上(60%)おり、「文法」指導において「話す・聞く」ことを意識した指導が必要であるとする立場をとっている点にも注目すべきではないだろうか。

(4)ア. (現在の「読む・書く」中心の「文法」指導で、「話す・聞く」力も養成できると考えている。)を選んだ教師には、質問D.における指導展開および形態において、oral/auralなものを取り入れている教師が、ほとんどいなかった。

(5)エ. (受験のための指導をしなければならない。)を選択した教師が多いことがわかるが、しかし、その背後には「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導の必要性を認めているものの、指導しなければならない文法事項の多さ・時間不足等の理由により、できないと考える教師が多い。

また、使用している教材の例文のまずさを指摘する教師も多く、現実的でない、無味乾燥なものが多い、とにかく難しすぎる等をあげており、教材選択(特に、場面に適した例文の準備)の点で現場の教師の苦勞がうかがえる。

### 3. まとめ

以上の調査結果から、多くの高等学校において、体系的に、あるいは能率的に指導ができるという点から、特別に文法授業のための時間を設けていることがわかった。

実際の指導に関しては、展開において多くの教師が、日本語で規則を説明するパターンを用いていたが、その中で、使用する例文に関しては、身近な表現を使用したり、わかりやすいものを辞書などから引用したりして工夫していることがわかった。文法用語に関しても、なるべく使用しないようにするなど、生徒にできるだけわかりやすく指導しようとしている傾向がうかがえた。

また、OCが導入されたことによって、わずかではあるが、「文法」指導の方法やその方針にoral/auralな面を取り入れる変化が見られた。また、変化が見られなかった中にも、変化を期待している教師の意識が多分に含まれており、今後の変化が待たれるところではないだろうか。

### 註

1 日本の英語教育における文法指導について、どのように考えられてきたかを年代別に概観すると、70年代初期において、荒木(1974: 8-11)は、外国語教育における文法指導の位置づけについて、その指導のあり方を、その言語の文法の形式的特質を教えるのが目的ではなく、あくまで、外国語の実用的目的を達成するための手段に過ぎないとした上で、日本の外国語教育の実の上がないことを、言語学的に有意義な言語事実を教えないこと、運用練習に時間をかけないこと、間違った運用練習をさせていることなど、指導のまずさを指摘している。佐々木(1974: 12-14)は、文法を「広義の文法・狭義の文法」という視点から、文法指導は必要なものであると説き、教室で教えられる文法の固定的観念を否定し、「言語学習」と「言語使用」には、それらに関連づけさせる"linking practice"を考える必要があるとし、同じく「構造か場面か」という問題に対して「言語使用に対応する練習に不可欠な situation との関連を考え、構造練習をただ闇雲に機械的にやるのはやめて "conscious attention to grammar in the context of meaningful use" という形の提示をまずやり、良くわからせてから "meaningful practice" を与える」という2段階の練習が必要であると説いている。稲村(1974: 15-17)は、言語習得について、母(国)語と外国語との違いを指摘し、特に、外国語学習において、学校の教師が「正しさ」を要求するあまり、生徒の言語活動が萎縮する点を問題視し、文法の指導は communication に視点を置いたものにすべきであると説いている。

80年代初期において、黒川(1983: 6-7)は、鳥居(1983: 15-17)が提案した科学性を持った「教育文法」への再提案という観点から、小山内(1981)の、文法は「英語学習が、より多くの生徒によって、より早く、より愉快に、よりたやすく行われるようにするための「縁の下の力持ち」的文法」という立場を指示し、生徒が納得のゆく説明のできるもの、そして "practical and useful" でなければならないとし、さらに、文法上の概念と音声上の概念を結合させた指導が必要であると説いている。大井(1983: 8-11)は、「文法は、英語習得を容易にし、無駄を省いて早く目標に到達できるように奉仕すべきである」とし、その指導・学習には、英語そのものを学ぶこと、記憶より発見、一貫した秩序だった指導(文法に関する諸説の中で、一番良いと思われるものを採用すること)が大切だと説いている。また、英語の持つ多様性、例えば、地域によっては "He doesn't know nothing." のように、二重否定を肯定ではなく、強い否定に使用しているというように、教科書以外は駄目というかたくなな態度ではなく、ある程度の柔軟さも持つておくべきであると説いている。大場(1983: 12-15)は、学校文法をどう軽量化するかという視点から、学習量そのものを少なくする方法と体系化によって、同じ量を軽く感じさせるという2つの方法を提案しているが、結論として、文法は体系であるという立場から、教師が様々な角度から、苦勞をしながらわかりやすく教えていくことが大切であって、不必要だからといって削除すべきものではないと説いている。



80年代後半において、岡田(1989: 8-9)は、コミュニケーションをする上で、文法の習得は必要不可欠なものであるが、学校文法に対して、近年の科学的研究の成果を取り入れる必要性を、談話文法・発話行為・言語習得の3つの例を挙げながら説いている。織田(1989: 10-11)は、「文の文法構造というものは、本来、音調の微妙な変化や、呼気の巧妙な調節によって表現されていたものであり、それだけに、発音と文法の結びつきは、人間感覚の原初的な働きに根ざしたものと見える」という立場から、音声と文法の結びついた指導が必要であり、学習者に local error ばかりを意識させるのではなく、ふんだんに英語を耳で聞かせ、その構造を肌で感じとらせることが必要であると説いている。土屋(1989: 12-13)は、Widdowson(1978)が提唱した"usage"と"use"という視点から、学習者は、言語を習得する場合、正しい文を作る能力と、ある文がどんなコンテキストで使われる可能性があるのか、また、あるコンテキストでどんな文が適切であるのかという知識も獲得する必要があると説き、これまでの文法指導で欠けていた"use"の問題を、情報交換のルールと話者の心的態度の表現の2つの面から、その重要性を説いている。米山(1989: 14-15)は、「文法指導は、それ自身が究極の目的ではなく、英語によるより効果的なコミュニケーションを実現するための手段であることを念頭に置くことが大切」だとし、「形式上のみ」を焦点化するのではなく、「場面化」することによって「手段」としての文法を指導することが大切であると説いている。そして、その具体的な方法として"role play, information gap, activity, interview, simulation"等を挙げている。

最後に、文法用語についてであるが、片山(1993: 14-16)は、その使用回数の多さから、生徒に文法は難しいという意識を助長させているとし、使用に関しては、教師の立場からだけではなく、生徒の立場に立って使用すべきであることを、アンケートの結果から主張している。同様に、三浦(1990: 123)は、その使用には、十分な計画性を持った指導が必要だとし、生徒に負担をかけない程度に導入すべきだとしている。

#### 【参考文献】

- 荒木 一雄 「文法理論と英語教育」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1974, 8-11.  
 稲村 松雄 「言語活動と文法の指導」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1974, 15-17.  
 大井 上滋 「指導・学習のための文法」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1983, 8-11.  
 大場 昌也 「試論 新学校文法」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1983, 12-15.  
 岡田 伸夫 「これからの文法指導の要点」【英語教育】大修館書店, 11月号, 1989, 8-9.  
 岡田 伸夫 「コミュニケーションに役立つ文法指導」【現代英語教育】研究社出版, 5月号, 1989, 11-13.  
 小山内 洸 「英文法の新しい考え方学び方」三友社, 1981.  
 織田 稔 「文法を意識させない文法指導」【英語教育】大修館書店, 11月号, 1989, 10-11.  
 片山 七三雄 「コミュニケーションの手段としての『文法用語』」【現代英語教育】研究社出版, 5月号, 1993, 14-16.  
 片山 嘉男 編 「新・英語科教育の研究」大修館書店, 1994.  
 金谷 憲 編 「学習文法論-文法書・文法教育の働きを探る」河源社, 1992.  
 黒川 泰男 「『教育文法』についてひと言」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1983, 6-7.  
 佐々木 昭 「文法無用論について」【英語教育】大修館書店, 5月号, 1974, 12-14.  
 田中 茂範 「データに見る受験英語」【現代英語教育】研究社出版, 1月号, 13, 1994.  
 田中 春美 「教育文法と第二言語習得における意識化の問題」【英語展望】No.100, 1994, 55-58.  
 土屋 澄男 「表現・コミュニケーションのための文法指導」【英語教育】大修館書店, 11月号, 1989, 12-13.  
 鳥居 次好 「英語教育界の今日の課題」【英語教育(創刊30周年記念増刊号)】大修館書店, 1983, 15-17.  
 広島大学教育学部英語教育研究室 「高校生の英語学習意識(3)」【英語教育研究】広島大学英語教育研究会, No.32, 1989, 71-126.  
 松畑 熙一 「英語授業学の展開」大修館書店, 1991.  
 松畑 熙一・高塚 成信 「英語授業を魅力的に」大修館書店, 1989.  
 松村 幹男 編 「教職課程講座 第18巻 英語教育学」福村出版, 1990.  
 三浦 省五 「検定文法教科書の廃止と高校現場」【現代英語教育】研究社出版, 11月増大号, 1993, 8-10.  
 米山 朝二 「文法と場面別・発想別」【英語教育】大修館書店, 11月号, 1989, 14-15.

Abraham, R.G., "Field Independence-Dependence and the Teaching of Grammar," TESOL Quarterly, 19/4, 1985, 689-701.

Allan, D., "Teaching Grammar Today: What's the Rule?" 【英語教育研究】No. 32, 1989, 38-49.

Brown, H.D., "Teaching Grammar & Vocabulary," Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy, Prentice Hall, 1994, 347-372.

Bygate, M., Tonkyn, A. and Williams, E. (eds.) Grammar and the Language Teacher, Prentice Hall, 1994.

- Celce-Murcia, M., "Grammar Pedagogy in Second and Foreign Language Teaching," TESOL Quarterly, 25/3, 1991, 459-480.
- Eisenstein, M.R., "Grammatical Explanations: Teach the Student, Not the Method," Long, M.H. and Richards, J.C. (eds.) Methodology in TESOL: A Book of Readings, Newbury House, 1978, 282-292.
- Ellis, R. Classroom Second Language Development, Prentice Hall, 1988, 135-157.
- Littlewood, W., "Form and Meaning in Language-Teaching," Modern Language Journal, 64/4, 1980, 441-445.
- Rutherford, W.E., and M. Sharwood Smith (eds.), Grammar and Second Language Teaching: A Book of Readings, Newbury House, 1988.
- Widdowson, H.G. Teaching Language as Communication, Oxford University Press, 1978.

[APPENDIX 1]

質問D. (\*原文のまま載せたものであるが、内容が同様のものは省略させてもらった。)

(4)「文法」の指導で、特に気を配っていること(工夫されていること)は何ですか。

- ・文法のみ学習に終わることのないように、英作・読解に結びつくよう努力している。
- ・できるだけ身近な例を出して、わかりやく説明する。
- ・少しでも簡単に文法の規則を理解させるようにすること。
- ・できるだけ簡単・簡潔に要点を説明すること。
- ・場面を設定して、例文が生きるようにする。
- ・例外をできるだけ示さずに、文法が難しいことを説明する。
- ・できるだけ平易で簡素な例文・印象深い例文を示して基本を押さえること。
- ・規則・法則を覚えるのではなく、理解できるように指導すること。
- ・文法用語をなるべく使わないようにすること。
- ・教師からの一方通行にならないようにすること。
- ・日本語の授業にならないよう説明は最小限に押さえること。
- ・生徒にできるだけ多くの英文を作らせること。
- ・なるべく同じ内容は1週にまとめて忘れないうちにすませる。
- ・授業のパターンを画一化せず、さりとて混乱するほどは変化させずにおくこと。
- ・コミュニケーション能力を伸ばすための基礎(骨組み)を学習しているのだということを生徒に意識させるようにしている。
- ・「文法を知らなくても英語はできる」ということを納得させる。「文法は後から生まれたものである」と。
- ・Textのみではどうしても教材の量が不足するので、できるだけ多くの例文を提示しながら、規則性を理解させるようにしている。
- ・板書にまとめ、しつこいくらいに何度もいう。
- ・文法用語を画一的に使用せず、わかりやすい言葉で説明する。
- ・練習問題の量をこなさせる。
- ・暗号を解説するための授業になっていないか。
- ・文法のための文法にならぬよう、その文法が言語使用上いかに役立つかを強調する。
- ・公式化して、できるだけ簡単にする。
- ・図を板書したり、色チョークを使う。
- ・プリント学習により、練習を数多くさせて、英文そのものに慣れさせる。
- ・実際に使える英語の基礎知識となるようにすること。
- ・体系的に指導している。
- ・口頭での練習。
- ・例文を対比して並べ、違い・ポイントを説明する。
- ・日本語対英語の一対一にならないように気をつけている。
- ・1つの文法事項と他の事項、文法全体との関連を常に意識させること。
- ・できるだけ多くの例文を示し、そこからルールを見つけ出し理解させる。
- ・生徒全員が理解できるようにすること。
- ・細かい文法事項・規則に深入りせず、各項目のエッセンスをとらえさせること。
- ・既習の単語のみで例文を示す努力はしている。
- ・例文の丸暗記にならないよう、規則性に気づかせ応用力をつけさせる。
- ・入試問題との関連を持たせ興味づけしている。

- ・まずは、生徒に予習をさせる（自分の力でポイントを理解させる）。
- ・「5文型」「句と節」「品詞」等の基本的な事柄に常に返りつつ、規則性を定着させること。
- ・できるだけ音読を重視し、リピートさせたりすることを心がけている。
- ・場面設定などで、文法理解がスムーズにできるようにする。わかりやすい例文を選んだり、考えたりする。
- ・身辺の例文で場面設定。
- ・解答にいたるまでのプロセス（解説）に力を入れる。
- ・「文法の為の文法」にならないようにそれぞれの文が使われる場面・状況を説明している。
- ・単調にならないようにしている。
- ・語順に注意させる。
- ・重要文の暗唱。
- ・言い回しを誤ると、違った意味になるような表現には気を配っている。反復練習させるより手がない。
- ・基本事項をText 以外を使い板書等で説明、理解させる。
- ・必ず予習をさせておき、Text をこなしていく。
- ・国語力のない子どもには、英文法、特に「表現法」「書き換え」を通して、興味を持たせる以外に道はないので、多くの練習問題をさせる。
- ・例文の与え方について、生徒が読んですぐに理解できるものから段階に分けて、（できるだけ）英英の学習辞典から引用している。学習内容を他の英文で書き換えさせることで、本当に理解しているかを確認、次の指導にいかす。
- ・「文法」がわかるというのではなく、身につく・使えるようになるためにできるだけ英文を作る、話す量を増やす。
- ・単調にならないように音声指導、暗唱、導入として例文を英作させるなど。
- ・辞書の活用方法。
- ・英語I,IIの教科書との関連性をもたせる。
- ・コミュニケーション能力の育成につながる文法という考えを基本にしている。

(5) 「文法」の指導で、特に苦勞されていることは何ですか。

- ・「文法」を日本語を使って教えるとき、「英語」と「日本語」の言語そのものの根本的相違点があるため、理解させるのが難しい。
- ・わかりやすい例文を集めること。
- ・文法用語をどの程度使用するか。
- ・表面上、一時的な理解をさせることは可能だが、本当の意味での理解をさせることが難しい。
- ・虫食い勉強にならないようにすること。
- ・時間的余裕がなく、説明→練習問題の繰り返しで、マンネリ化している。
- ・一方的な授業になってしまうことが多いので、生徒の活動をいかに活発にすること。
- ・練習問題を数多く一緒に解く時間をなかなか作り出せないこと。
- ・わかりやすく、楽しく教えること。
- ・教科書が生徒の実態に必ずしもあっていないこと。
- ・生徒に受験英語もコミュニケーションのための英語も基本においては同じであることを理解させること。
- ・文法用語が「カタイ」文法に触れることによって英語を難しくしてはいないか、気をつけている。
- ・例文に「感動的」な内容の文章を用いること。
- ・基本的な文法用語（副詞・節等）がわかっていない。
- ・文法用語の多用や規則の解説だけでは生徒の学習意欲や集中力に限度があるので、具体的・日常的な例文から、ごく自然に英文の表現形態になれていけたらと思いつつ、型にはまった表現のドリルを繰り返しているが、期待するほどの効果はほとんど見えない。
- ・説明過多にならぬよう気をつけている。
- ・教科書の本文がそのまま文法説明に使われていて、複雑すぎるので、平易な例文を他から見つけてくること。
- ・「文法」がどんなに大切なのかということ。
- ・定着化への練習の時間がない。音声指導がおろそかになりがち。
- ・ややもすれば、文法のための文法になりがちなので、いかに英語（運用）力に持っていくかの点。
- ・3年生になってやっと定着する程度しか教えられない。
- ・「場面」設定（生徒の日常生活に、より近いもの）
- ・試験範囲等の進度を気にしなければならないため、解説だけで終わってしまうところが多くなる場合が多いこと。
- ・例文に興味を引きつけるものがないこと。
- ・中学校時に既習したはずの基礎が、不消化に終わっている。

- ・英文の暗唱を徹底させること。
- ・日英の言葉の比較対照。思考解決ができるように。
- ・生徒の学力差が大きいので、授業以外のフォローが必要なこと。
- ・あれもこれもと内容が深くなってしまいがち。
- ・文法用語の解説に時間をとられ、実際の英文にあたらせる（練習も含む）時間があまりない。
- ・生徒がテキストの英文を訳せただけで、理解した気になってしまうこと。
- ・実用英語とのギャップ。
- ・いかに生徒に予習をしてこさせるか。
- ・なるべく、「英語で導入 → 場面設定」のようにしたいが、なかなか準備に時間がかかり、今のところ難しい。系統だった説明ができるようになりたい。
- ・文法で、どのようにティームティ칭ングを行うか。無味乾燥にならないようにする。
- ・「仮定法過去」の動詞がなぜ、過去形になるか等、なぜそうなのかの説明がつかないときの説明。
- ・抽象的説明（仮定法等）を理解させること。
- ・複雑な英文を読ませる時に、文法用語を使わずに説明するのは無理。中学校での文法指導がなくなりつつあるようで、高校で急に導入しても定着しない。
- ・文法そのものは生徒にとって理解しにくいので、練習問題などは定着しにくいところがある。
- ・本来の「文法」としてではなく英語の音声を理解するものとして考えさせることを一番に考えている。
- ・生徒の態度が受け身になってしまうこと。
- ・自分の言葉として利用できるようにする。
- ・どうしても日本語での説明が長くなり、生徒を退屈させてしまう。
- ・プリント作り。指導手順に合った問題集がない。
- ・文法で習得したことを実際に使えることが大切であること力説する。
- ・生徒の英語学習の目的意識がきわめて低い。ただ科目にあるから習っているという感じ。
- ・話法の指導と生徒の語彙不足。
- ・基礎的な語彙（動詞の活用形、動詞の意味の変化、他動詞と自動詞の働きなど）を習熟させること。
- ・あまりにも指導項目が多く、十分に理解できない生徒がいる。
- ・練習問題の解答が出回っていて、わかっているのにわかっているふりをされること。
- ・「ましまり」の学習だから、面白くないこと。
- ・英語の総合力があまりない中で、文法事項のみを取り立てて教えていくわけだが、生徒には、文法という科目があり、リーダーという科目があるわけで、つながらないと思う。文法を強調する必要性は少ないと思う。
- ・高校英語として、慣用表現を覚えさせること。時制の問題・無生物主語・準動詞・関係詞・仮定法を完全にマスターさせる。
- ・音声面も取り入れて、耳からの英語をもっと使いたいと思うが、書く文法事項の基本的な項目を押さえると、入試を意識した応用問題を取り入れていく時間も確保しなければならず、教師が教え込むのではなく、生徒に気づかせる指導が十分に行えていない。
- ・全体的に定着率が低い。「使えるようになる」ためにどういう方法がよいか試行錯誤している。
- ・生徒が間違いを恐れる。
- ・例文が前後の脈絡のないもので、意味がとりにくいことがあること。
- ・印象が薄く、頭に残らない例文が多い。
- ・問題演習の時間が足りず、プリント等を宿題にせざるを得ない。
- ・前置詞や冠詞。
- ・週1時間では、教科書が進まないこと。
- ・まず、文法用語をわかりやすい日本語にして説明する必要がある。
- ・文法の学習が目前の定期考査のためであって、日常の英語を使いこなすための法則として定着していない。
- ・単文（一文）では、状況・前後関係がわかりにくいので、（必要に応じて）日本語による解説が多くなる。

[APPENDIX 2]

高等学校における「文法」指導の実態調査 (その1)

「文法」指導について、先生が日頃考えたり、感じたりしていることをおたずねしたいと思います。該当する項目に記入、および、○印をつけて下さい。

\*質問A.Bは、各高等学校1校の回答をお願いします。  
\*質問C.D.Eは、英語科の先生方全員に回答をお願いします。

質問A. 履修パターンについて

(1) 1年生時において「文法」指導のための時間を設けていますか。  
(補習・課外授業等は除く)

ア. はい      イ. いいえ

(2) (1)で「はい」と答えられた学校におたずねします。  
1年生時の受履の履修パターンを教えてください。(時間数週)

英語 I	Grammar	Oral Communication A,B,C
ア.	2	2
イ.	2	2
ウ.	2	2
エ.	3	1
オ.	3	2
カ.	3	2
キ.	4	2
ク. その他	( )	( )

(3) 昨年度と今年度の Grammar の授業の時間数に変化がありますか。

ア. 変化していない。  
イ. 増加した。(具体的に 時間 → 時間)  
ウ. 減少した。(具体的に 時間 → 時間)

(4) (1)で「はい」と答えられた学校におたずねします。  
1年生時において「文法」指導のための時間を設けている理由を教えてください。  
(複数回答可)

ア. 英語 I の教科書では文法の体系的学習が不十分だと思う。  
イ. 受験のため。  
ウ. コミュニケーション能力を養うため。  
エ. 独立して指導した方が能率が上がるため。  
オ. その他 ( )

(5) (1)で「いいえ」と答えられた学校におたずねします。  
「いいえ」と答えられた理由を教えてください。(複数回答可)

ア. 学習指導要領に示されていないから。  
イ. 英語 I の教科書で十分だと思う。  
ウ. 生徒に自習させている。  
エ. 「文法」指導のための時間が無い。  
オ. 補習などで行っている。  
カ. 特にする必要を感じない。  
キ. 他学年で行っている。  
ク. その他 ( )

質問B. 教材(テキスト)について

(1) 文法の教材は主に、どのようなものを使用していますか。(複数回答可)  
(差し支えなければ、書名・出版社名等を教えて下さい。)

ア. 準教科書的なもの ( )  
イ. 教科書付属のプリント ( )  
ウ. 市販の問題集 ( )  
エ. 海外の文法書 ( )  
オ. 自作のプリント ( )  
カ. その他 ( )

(2) どのような目的で、その教材を使用されていますか。(複数回答可)

ア. 受験のため  
イ. 中学校で十分な力がついていないので、それを補うため  
ウ. コミュニケーションの能力を養うため  
エ. 独立して指導した方が能率が上がるため  
オ. その他 ( )

(3) 生徒に、レファレンスブック(参考書)を持たせていますか。  
ア. はい      イ. いいえ

(4) (3)で「はい」と答えられた学校におたずねします。  
どのように使用させていますか。

ア. 特に指示はせず、生徒が自習用利用している。  
イ. 教師が範囲を指定して、自習させている。  
ウ. 教科書等と授業で併用している。  
エ. その他 ( )

(5) (3)で「はい」と答えられた学校におたずねします。  
差し支えなければ、書名・出版名を教えてください。  
( )

高等学校における「文法」指導の実態調査 (その2)

- \* 「文法」指導全般について、英語科の先生方全員におたずねします。
- \* 「文法」の授業を担当されていない先生は「英語ⅠⅡ」等での文法指導についてお答え下さい。
- \* 以下、該当する項目に記入、および、○印をつけて下さい。

質問C. 先生は教職につかれて何年になりますか。 \_\_\_\_\_ 年

質問D. 授業展開および形態について

- (1) 授業で「文法」を指導される際、主にどのような展開をとられますか。
- ア. 日本語で説明 → 練習問題 → 答え合わせ
  - イ. 日本語で説明 → 音声指導 (テープ等) → 練習問題 → 答え合わせ
  - ウ. 特に説明はせず、テキストについている練習問題の答え合わせ
  - エ. 例文を数多く提示 → 生徒に規則を気づかせる → 解説
  - オ. 英語で導入 → 場面設定 → 練習 → 解説
  - カ. その他 ( \_\_\_\_\_ )

(2) 授業で「文法」を指導される際、主にどのような形態をとられますか。 (複数回答可)

- ア. 日本語のみで説明している。 (例文は除く)
- イ. テキストに出てくる例文を生徒に音読させる。
- ウ. テキストに出てくる例文以外の例文を利用する。
- エ. 教師が口頭で英語を使用する。 (例文は除く)
- オ. 「場面」を設定したり、ゲーム等の活動を取り入れている。
- カ. ALT とのティームティーチングをしている。
- キ. テープを利用する。
- ク. 教師が英英辞書を利用する。
- ケ. 生徒に英英辞書を利用させる。
- コ. 生徒に和英辞書を利用させる。
- サ. レファレンスブック (参考書) を利用する。
- シ. その他 ( \_\_\_\_\_ )

(3) 授業で「文法」を指導される際、「文法用語」をどの程度使用されていますか。

- ア. 全く使用しない。
- イ. 全般にわたって使用している。
- ウ. 必要な場合のみ使用する。
- エ. その他 ( \_\_\_\_\_ )

(4) 「文法」の指導で、特に気を配っていること (工夫されていること) は何ですか。

[記述]

(5) 「文法」の指導で、特に苦労されていることは何ですか。

[記述]

質問E. Oral Communication と「文法」指導との関連について

(1) 新しく Oral Communication が導入されて「文法」の指導法および「文法」指導の方針に変化がありましたか。

- ア. はい (→(2)へ)
- イ. いいえ (→(3)へ)

(2) (1)で「はい」と答えられた先生におたずねします。

どのような点で変化がありましたか。 (複数回答可)

ア. 生徒が狙う小さな文法上の誤りに対して寛容な態度になった。

(特に、英作文や口頭発表等において)

- イ. 音声を重視するようになった。 (抑揚、文勢等)
- ウ. その文法項目が実際に使用される「場面・状況」を重視するようになった。
- エ. 「話す・聞く」活動における「文法」指導のあり方に関心を持つようになった。
- オ. 生徒に英語を使用させる機会が以前より増えた。
- カ. 教師が英語を使用する機会が以前より増えた。
- キ. 「文法」指導の時間が減り、十分な指導ができなくなった。
- ク. その他 ( \_\_\_\_\_ )

(3) (1)で「いいえ」と答えられた先生におたずねします。 その理由を教えてください。

ア. 以前から「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしている。

イ. 特に、「話す・聞く」ための「文法」指導の必要性を感じない。 (→(4)へ)

ウ. 「話す・聞く」ことを意識した「文法」指導をしたいと思うが、諸事情で現在、まだできていない。 (→(5)へ)

(4) (3)の中で、イ.を選ばれた先生におたずねします。 その理由を教えてください。

ア. 現在の「読む・書く」中心の「文法」指導で、「話す・聞く」力も養成できると考えている。

イ. 「話す・聞く」ためには、「文法」の知識はあまり重要ではないと考えている。

ウ. その他 ( \_\_\_\_\_ )

(5) (3)の中で、ウ.を選ばれた先生におたずねします。 その理由を教えてください。 (複数回答可)

ア. 時間的余裕がない。

イ. 教材が適していない。

ウ. どう指導してよいかわからない。

エ. 受験のための指導をしなければならぬ。

オ. その他 ( \_\_\_\_\_ )

有り難うございました。

なお、このアンケートの結果は、集計をしてお送りしたいと思います。